

浄土

1978-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (新聞紙類)
昭和五十二年十一月二十五日印刷 昭和五十二年十二月一日発行
第四十四卷 第三十二号



S. Kuz

しつけ

先日友人の晋山式(寺の住職になる式)に出席のため千葉県木更津市の選択寺(浄土宗)にうかがった帰り、鎌倉まで帰る小生は、木更津港から川崎港までカーフェリーに乗船しました。折から飛び石連休最後の十一月五日(日)ですから、家族連れの行楽客で船内はいっぱいでした。カーフェリーですから、車から離



れて、船室の方へ皆子供連れで出て来ておりました。船室ではテレビ放送でバレーボールの実況をやっており、七十分乗るため、その放送をみているお客さんもかなり多くおりました。しかし船室の中は子供が多くうるさくて、アナウンサーの声や解説者の声など聞こえません。まるで船室を遊園地とまちがえているのではないかと思うような子供でいっぱいでした。それでは子供等の親は何をしているのかと思うと、夫婦で席に坐って談笑しているだけで、てんでんばたばた船室内をわが者顔にかけまわる我が子に注意するわけでもありません。先般、青函連絡船に乗ったときは、あらかじめ修学旅行に対して、一般の乗船客の迷惑にならないよう、あまり船内をうろつかないようスピーカーで注意しておりました。自分の子が他人の迷惑になっておるのも注意しない多くの親をみて、これからは小学生以下の子供連れの親に船内放送で注意

をあらかじめする必要性を感じました。きつと普段狭い団地に住み、また狭い自家用車に閉じこめられていると、開放感から、はめをはずす結果になるのだと思います。それに核家族化された現在の家族のしつけはなくなってないと思いました。

また先日、静岡県焼津市で、しつけ塾が出来大当りしているという記事を読みました。が、これでは全国にしつけ塾をつくって貰わねばならぬと思いました。子供の自由奔放にまかせて注意もしない親、これでは昔の拡大家族時代の祖父、祖母、または両親によって無理なくしつけが行われた時代がなつかしく感じられて来ます。現代の子供は親でだめならば、しつけ塾へでも入れて規律と礼儀をたっぷり仕込んで貰う以外ないと思います。幼くして保育園の時間外保育にあづけられ、これでは親がいながら、親に育てられていない子供が出来てしまい、まことに考えさせられます。

十二月号



行は一念十念なほ空しからず
と信じて無間に修すべし。一
念なほ生る況んや多念をや。

——『一紙小消息』

目次

法話

かもめのジョナサンの成道……………真野竜海……(2)

一年は終る 安泰の宗門に新風送ろう……………高橋良和……(6)

特別寄稿

ある念仏者のアメリカ抑留生活記(下)……………窪川信丈……(15)

〈民話シリーズ〉持ちつ持たれつの餅……………谷川のぶ也……(24)

自然を考える⑧

社会福祉と自然……………野坂勉……(10)

〈随想〉朝の歌……………江目達雄……(20)

〈連載〉善導大師の生涯とその教え(2)

善導大師の時代……………(28)

江戸後期の宗門歌人

良洗上人の研究④……………吉田光覚……(32)

浄土句集……………一田牛畝選……(30)

〈表紙裏・巻頭言〉しつけ……………佐藤行信

念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



かもめのジョナサンの成道

真^ま野^の竜^{りゅう}海^{かい}

(大正大学教授・文博)

かもめのジョナサンといえば、四、五年前に、爆発的に連続、各週のベストセラーになって、一時は手に入るのもむづかしかった本の名であることは、大方の知られるところでありましょう。映画にもなりましたから、たいへん有名なかもめです。しかし、その物語というか、本の内容は、とりたてて面白いものでもなく、むろん、ラブストーリーはかけらもありません。ただ一匹のふしぎな、かもめ離れした考えの、ジョナサンと名づける主人公のかもめの半生が幻想的に語られているだけです。私も、その当時、ある人々に、わかりやすく話をしるといわれていたのでそんなにみんなで争って読まれている本ならば、万人の興味を引く中味があるにちがいないと思って、探して買ってみました。ところが、当てがはず

れました。新幹線で東京を発つ時、私の前の席の女性が、この本を読みだしましたが、二頁も読まないうちに居眠りをはじめました。映画を見た人も、なんのことだかよくわからないという感想が多かったようです。では、どうして、あのように読まれ、増刷につぐ増刷になったのでしょうか。

原作は、リチャード・バックというプロのパイロットです。訳者の五木寛之氏は、あとがきで、「井上謙治氏が、読む者が、それぞれ神秘的原理を読み取ることできる偉大なロールシャッハテストだ」ともいう言葉を伝えています。私は、まさにそうだと思います。五木氏は、このかもめにキリストの姿を見たり、バイブルのようになんかはいささか気骨が折れるといわれているが、

私は、私なりに、いな、おそらく作者、もしくは、それを読みはじめた人々の底にあるものを考えてみたいと思います。

私は、こう読みました。

ジョナサンは、ふつうのかもめの群れから離れて、いっしょうけんめいに高等飛行術の習得に励んでいました。それ自体、かもめ離れしたことです。彼は、ふつうの人生、いな、かもめの生き方には満足しなかったのです。本能のままに、食べるだけの生き方、魚を求めるだけの飛び方ではなくて、群れのかもめとは一段ちがう、高い自己を求めています。ふつうのかもめにならない急降下などの飛び方は、その第一歩でした。群れのかもめの白い目をよそに、練習を重ね、限界を突破した。これは、本能の飛び方から、技術の世界へ入ったことを意味しました。

しかし、仲間のかもめは、かもめというものは、ただ、その餌を食べて、あたうる限り、生きながらえるという伝統を汚したといって、ジョナサンを追放、一人暮らしの流刑に処してしまった。

しかし彼は、むしろ仲間が、輝かしい飛行の道のある

ことを信じないことを悲しんでいた。練習が、さらに高度となったある日、ふしぎな二羽のかもめに誘導されて、地上から雲の上へ、つまり、天国へ上昇する。十二羽のかもめが出迎えに現われる。この数は、使徒の数であるから、キリスト教の導きで、天国に行ったことを意味すると思います。そこで、教官のサリヴァンに、ここにいる連中は、一つの世界から、それも大して変りばえのしないもう一つの世界へ移ってきたのだといわれた。つまり技術から、キリスト教の信仰の中に来たのである。この世界も、もう一つ変りばえのしないということ、物足らなさを暗示しているのである。

すると、長老のかもめでチャン(張)というのが居た。

これは、その名の示すごとく、東洋人の名である。私は、ここに、禪の長老を作者は考えていると思う。この本は、はじめ、アメリカ西海岸のヒッピーたちで読まれているうちに、爆発的に一般に広がったということ、ヒッピーでは、禪の本とか、知識をもつことが、一つの暗流のようであること、などからして、自然な受けとり方だと思う。かつて、ハワイ大学の先生方と、このような私の見解を示したら、先方でも、サブ・テキストとして

読んだ、高校でも、かなり読まれたが、私のようには思
つてみなかったということであつた。しかし、興味を示
しておられた。とにかく、このチャンの指示で、彼は、
キリスト教の天国から、仏教の考え方の世界に入るの
であらう。チャンは言います、「天国とは、場所ではない。
時間でもない。天国とはすなわち、完全なる境地のこと
なのだから」と。われわれの理想は、長い時間をかけ
て、はるかな天国へ生天することではない、完全な境地
というのは、距離もなく、時間もなく、その所、その時
に実現されていていいものだ、「今の時、今の所で覺るとい
う考えに気づくべきだ」と指導していますから、もう、そ
れは生天でなく、この世からの完全解脱の境地といえま
しょう。だから、ジョナサンは、飛ぶこと、つまり距離
の移動にけんめいでしたが、チャンは、そういう何万キ
ロを飛ぶのに、いくら時間をちぢめようと思つても限界
があるから、そういう考えでなく、そのような技術を離
れ、知ることによつて、即ちそこにあること、「思念速
度」、つまり、(覺りという言葉は、もちろん使われていま
せんが)瞬間的移動とでもいう心の持ち方を會得すること
を教えます。物語として、チャンは、身をもつて、閃光

のように移動をして見せます。ジョナサンが長い「精神
集中」(これは禪定と訳してもいいくらいでしょう)の後に、
その境地に達したらしいのを見て、チャンは、「いい
ぞ!」「お前はやりおおせたのだよ、ジョン」と、いわ
ば、見性の印可とできいふべき言葉を与えた。

次の段階は、「さて、それでは次のコントロールの間
題だが……」とチャンはいう。ただ、そのようなすばら
しい境地に達しても、それだけでは完全円満とはいへ
ない。「時間のほうの研究をはじめてもよい」という。そ
れは、こういうことかという、ふたたび、時間、現実
の世界、現実の仲間に目を向けることのようにありま
す。言葉は、続けられて、「……そしてお前はそのとき、
より高く飛びはじめ、また優しさと愛との真の意味を知
りはじめる用意ができたことになるのだ」という。コン
トロールという意味も、同じことで、ただ早いだけで
は、完全でなく、コントロールされ、人の役に立つてこ
そ、完全であるといえます。チャンの最後の言葉は「も
っと他人を愛することを学ぶことだ。よいか」というの
であつた。ジョナサンは、こうして、禪の覺り、自利か
ら、利他へという慈悲の心を教えられる。

ジョナサンは、優しさについて学べば学ぶほど、また、愛の意味を知ろうとつとめればつとめるほど、一層、地上へ帰りたいという思いに駆られるのである。彼は再び、地上へ帰る。還来穢国である。仲間の群れは、相変らず冷いが、しだいに、関心をもつものが、ジョナサンの下にひそかに集ってきて、彼は飛行を教えるが、たんなる技術ではなく、想念による飛行というものを理解させようとして、「思考の鎖を断つのだ、そうすれば肉体の鎖も断つことになる……」とも教える。身体を動かすこともさりながら、心の持ち方、心の目を開くことによつて、身体のかたまりからも離れてはどうか、と導きます。

さらに、一般の群れのかもめが、ジョナサンらを殺そうとした事件があつた後に、ジョナサンは、じぶんを殺そうとしたもの、その憎しみでも、愛するように絶対の愛を説きます。菩薩の愛もそうです。

ジョナサンは、このように、かつて自分を追放した地上の仲間たちにも、自分の得た喜び——覺りと私は考えるのですが——を分け与え、自らの覺りと、他人への愛を説いて、やがて死期を迎えます。高弟格のフレッチャ

ーに遺言をします。いわば、釈尊の涅槃の時に、弟子たちに、「自分自身をたよりとしなさい、私の法をたよりとしなさい」と言いきかせたようにです。弟子フレッチャーに、

「もうきみにはわたしは必要じゃないんだよ。きみに必要なのは、毎日すこしづつ、自分が真の、無限なるフレッチャであるとは発見しつづけることなのだ。そのフレッチャーがきみの教師だ。きみに必要なのは、その師の言葉を理解し、その命ずるところを行ふことなのだ」

と言います。釈尊の言葉とそっくりの内容です。ジョナサンは、その直後、体は空に浮び、かすかに光って、すきとおりのやがて虚空に消えさってしまいます。

私は、なるべく、本の中の主な言葉を、そのまま使つて考えてみたのですが、このジョナサンは、キリスト世界の中での仏教的な考え方を示しているとしたか考えられません。ジョナサンの達した境地は、完全な生きるものの生き方、道を示しているようで、それを成しとげたのですから、*「かもめのジョナサンのさとり」*といつていいでしょう。

一年は終る 安泰の宗門に新風送ろう

たか はし りょう わ
高 橋 良 和



年末の今日まで仏教界の大きな話題は、東本願寺問題である。あの大教団が、どうしたことか近代教団への脱皮がどうも漫々的である。地方に出かけると、隣りの西本願寺が、「本願寺は騒々しいですね、なにをしていますが」とたずねられるので困ることがある、と語っていた人がいた。ほんにその通りで、こと本願寺と名がつくと、西も東も区別なく紛争しているように感じるらしいが、それだけ本願寺教団の大きさというのか、地方に浸透している真宗教団の姿がわかるようである。

東本願寺は、大谷家のものである、という法主の考え方が、信徒をさし置いて法主の行動につながっていると見えるし、宗派当局との間に意志の疎通がなく、大谷派は大谷派、法主は法主といった二本のレールが敷かれ

ている感じにもうけとれる。封建制の強い真宗教団であるだけに、法主の意志も強く、その上宗派の宗議会と法主の対立がある以上、早期解決はむづかしいよう。十一月の十七日になって、法主と宗派代表とが会見したが、さてこれからの話合いはどうなるのか、まだまだ時間はかかりそうである。

西本願寺の方では、法主が退任して、光真門主となり、全国を巡錫し、本山に全寺院を集めて懇談し、よく新門主がスタートを切った。宗教界での一ばん若い門主であるだけに、その期待も大きい。東本願寺と対照的である。

本年は世界仏教徒会議が、東京、京都をはじめその他の地域で開かれた。我が国の仏教界としては、まさに画

期的な世界大会であり、三千人もの世界代表を集めただけに、なかなかの団結ぶりである。この団結ぶりを今日の仏教各宗がみせれば、仏教興流の一つの結び目が出来るといふものである。

どうも仏教各宗では、批判が先に立って、実行が遅れるくせがある。あの大きなポスターをデカデカとかかげた大会であっただけに、今後の活動にも、このような強力な和の心が欲しい。本年の最大の仏教界の快事であるといえるだろう。

そのなかにあつてチベットの活仏であるダライラマがそうした大会にやってきたが、亡命先のインドからの来日であつたのを、日中関係の進展という時期であつたので、政治的な考えからか、増上寺本山での追悼法要に間に合つただけという淋しい参加の仕方になる。北京への気がねであつたらしい。むづかしいことである。

日中友好といえば、本宗は宗派としていち早く日中友好浄土宗協会を組織して善導大師の一千三百年の大遠忌を前にして、日中友好に大きく乗り出した。すでに趙樸初中国仏教協会長からの招請があつたので、十月に稲岡総長を団長として、二十一名が中国に赴いた。

あちらでは至るところで国賓としての待遇をうけて大歓迎だったようであるが、特に善導大師の御廟である終南山の十三重の塔の前で法要を営んだのは、感激だったらしい。また大原の玄中寺での曇鸞、道綽、善導三師のお堂の修理工事の歟入れ式も稲岡総長がそれを行なったようで、中国側の配慮に感謝していた。肌で感じた中国での善導大師の偉大さということである。

昭和五十五年に迎える善導大師の大遠忌までには、更に日中友好の翼といった全浄土宗から、檀信徒を加えた訪中団が送られることになっているので、日中友好のきずなは更に深くなることであろう。『日中浄土』という友好の雑誌もすでに発刊しているし、目下第二号の編集中ということである。

第二回の訪中団の計画もあることと思うから、当分は中国への働きかけが目立つことになるだろう。

中国訪問とは別に、今度はハワイ開教八十五周年、開教制度八十周年を記念して、八月にはハワイへ訪問団が赴いた。今回はその数も三百五十名を突破する盛況であった。ホノルルの別院での記念法要やら、レセプション、そして各島の寺院を訪問して、ハワイの檀信徒との

交流を深めた。

もちろんその間宗門には開教振興協会といった海外開教を支援する組織が出来ているし、その募金も順調にすすんでいるのでおそらく今度は更に積極的に支援することになるだろう。ハワイだけでなく、ブラジル、北京、そして新しく寺を建てた沖縄などの寺院への支援は、一宗の責任であるだけに、大いに支援してもらいたい。

ハワイでは和英両文の浄土宗の聖典が出版されたこともうれしいことである。また沖縄では糸満市に開設された福祉施設である袋中園に新しく青雲寮という精薄施設の建設に着手している。その費用にと浄土宗青年会は、一千万円の募金に協力したのもよろこばしいことである。

先の吉水寮や、そよかせ寮には尼僧団体の吉水会や、寺庭婦人会が協力したが、今度は浄土宗青年会が力を入れたということは、今後の宗門の教化、伝道につけても宗務所だけでなしに、各種団体が立ちあがっているのは、なんとしても心強い。青雲寮もそろそろ完成のところである。

今年は二大本山の法主が替った。それもさることながら、長い間分派していた黒谷本山が合同したことで、な

んとしても宗門が明るくなった感じである。三十二年ぶりの合同であって、その記念法要も執行されて、宗門人はほっとしたことであろう。檀信徒にとってはその辺の事情は奈辺にあるかは知らないだろうか、大本山黒谷金戒光明寺が、浄土宗の大本山であることを忘れないでもらいたい。はっきり浄土宗と合同したのである。なによりもうれしい。

その黒谷本山では、沢崎法主が病気のために辞任し、そのあとに藤原弘道法主が普山した。京都の東山学園を退職して迎えられたもので、新法主の構想としては、この本山を教化の本山としたい、ということらしい。大賛成である。学校経営の手腕を更に本山で発揮してもらいたい。

首都の大本山増上寺も、大野法道法主が老令のために再選を辞退し、そこで三州の名刹大樹寺から、藤井実応法主が普山した。普山式は十一月十六日であるから、まだ湯気が立つほどである。

首都東京の本山として今後の活動を期待したい。その増上寺の境内に、長い間の懸案であった明照会館が、年内に竣工する。赤いレンガの建物であって、一部が宗務

所の教化センターとして活用されることになっている。

東京における教化の中心は、この明照会館ということになるだろう。会館の二、三階は宗務所が、そのセンターとして活用することになる。

そして増上寺は、更に境内の整備を着工している。

各本山のうちこの二本山は、法主の交替ということであるが、百万遍知恩寺、清浄華院、鎌倉光明寺、筑後善導寺、そして長野善光寺大本願は、いよいよ善導大師の遠忌の準備に入った。総本山知恩院はいち早く十億円の予算を遠忌に計上してその事業をすすめるという。おそらく明年度にはいずれかの事業が進行することであろう。おてつき運動も定着したが、明年度は更に新しくのびることを祈っている。

清浄華院の境内に宗門子弟のため浄山寮の増築が出来あがったのも今年である。事業があまり外にあらわれていないが、とも角も、子弟養成の問題を積極的に取り組んでいるような気がする。

そして宗門は安泰のうちに越年するが、その安泰のなかに新風を送る用意だけは忘れてもらいたくない。そしていよいよ一年は終ることになる。

「浄土」教化トラクト

『浄土宝暦』

B 6判・表紙共四十ページ

定価 一部四十八円

送料実費

◎檀信徒の皆様への新年のご挨拶等に恰好の施本となります。弊会へのご助成という意味もこめて、できるだけたくさんのご注文をお願いします。どうぞ広くご利用下さいますようお願い申し上げます。

在庫がまだ大分に残っております。発送事務のことなど、色々ご迷惑をおかけいたしますことありますが、どうか重ねてお願い申し上げます。弊会への心からのご支援を!!

発行 法然上人鑽仰会

社会福祉と自然



野の
坂

勉

(大正大学教授)

一

研究棟の一室に立つと、否応もなく目に入るものに、池袋、サンシャインなる超高層ビルがある。日本でもっとも高いとか、城北地区にはじめてできた東京の新名所だとかいうことである。そこには、占領期、巣鴨プリズンとして国際裁判に名をはせ、また敗戦までは、巣鴨監獄として近代日本の陰の部分としての歴史を刻んだ遺構

を見出すことはできないという。だとすれば繁栄の現代が捧げる壮大な墓碑なのかもしれない。

そんな目で大学の周辺を眺めてみると、眼前の滝野川には、わが国、初の精神薄弱児施設が石井亮一によって明治二十五年、開設されていることをしるのである(昭和三年、現国立市谷保に移転、滝乃川学園として所在)。そして、この巣鴨の地は、留岡幸助が非行少年のため感化事業を起したところである。西方に目をやれば、板橋の地には、わが国、公立施設として最古の創業と事業規模

において最大をほこり、かつまた現在、老人福祉、医療において世界最先端をいく東京都養育院がある。わが国、社会福祉の発達にとって養育院は、児童、障害者、老人の総合施設として活動を展開した近代社会事業の証人に擬すべき存在として位置する。また東京府癲狂院Ⅱ東京府巢鴨病院（現、都立松沢病院、世田谷所在）が隣接してあったのである。

最近、県庁所在地の都市近郊には、福祉村とか、福祉の町として、社会福祉関係諸施設を集結させ、冷暖房、給食、洗濯など集中管理方式をとっている所が多くみられるようになっていたが、ここ巢鴨一帯は、当時の東京市郊外の福祉村の体をなしていたものであったろう。

二

さて、留岡幸助がこの地、巢鴨に感化院を開いたのは、巢鴨教誨師事件（信教の自由をめぐる仏教とキリスト教の対立から政治問題化した事件）によって、警察監獄学校教授に転出した、明治三十二年のことである。感化教育をはじめめる動機となったのは、北海道空知集治監での実態

調査から、犯罪者は幼少期にその原因があることを発見し、矯正、更生問題の本格的研究のため渡米した成果による。

彼が感化事業を開始するにあたって、教育方針「家庭学校の四綱目」を発表（明治三十三年）しているが、そのなかで、「人は地を開き、地は人を開く」とし、教育の基本を環境をかえることであり、自然のなかで農業による労作教育を行なうこととしたのである。これは、彼が、感化救済事業の指導者的位置を占めた、大正元年の講習会においても、「感化事業実施法」として第一に、条件としての自然環境をあげ、「不良少年は人間に酔うているので。浮世の塵に汚され過ぎたのです。したがって自然分子の多い閑静な環境に移さなければならぬのであります」と述べている。そして大正三年には、北海道遠軽に農場を開き、施設を移転するに至るのである。現在、民間施設として唯一の男子教護院、北海道家庭学校がそこに所在している。

この家庭学校はまた、処遇法として小舎家庭制を採用したことで、それまでの徳目と規律を厳格に守ることを中心とするやり方とは対照的であったのである。家庭崩

壊と家庭教育の欠如せる環境にあった児童に回復の場を与えようとするこの方法は、非行児童を処遇する基本とされてきたところである。これは、ドイツの「ラウエハウス（家族制、一八三三年）」、フランスの「メトライ農園（小舎制農業コロニー、一八四十年）」など、十九世紀前半、ヨーロッパに起った矯正院、感化院運動に刺激され実践に踏み出されたものである。

三

自然に恵まれた環境と、夫婦制家族舎で非行児童の教育と保護に当るこのやり方は、現在大きく転換をとげつつある。すなわち、それは事実上、家庭生活の放棄を意味しており多分に宗教的信念ともいふべきものに支えられない限り維持し得ないからである。したがって、夫婦制から併立制として処遇を分担する形で、男子職員と女子職員によって編成する形態に移行せざるを得ないことになる。ここでは、個性的な保護者である夫婦に対する帰属感、同一視をもたせることで、基本的な道徳性、正しい価値観を身につけさせるといった伝統的、かつ人間

教育的な方法が限界に直面していることを意味している。勿論ここには、非行の原因論においても複雑化し、情緒障害など専門的に治療を要することもみられてはいらぬ。しかしながら、愛情をいただき、尊敬する人間によってはぐくまれ、そのなかで自然に影響を受け、その態度考え方を見習うといった関係が必要なくなるといったことは、人間社会が存続する限りあり得ないであろう。

四

これは、非行といった行動面に問題のある児童の処遇をめぐる問題だけではない。親との死別、離別など、家族の崩壊や、あるいは親子関係における監護態度や生活内容が不適当（虐待など）であるために社会的に養護している場合においても当面する問題である。すなわち、養護施設において、直接処遇に当る職員を「お父さん」、「お母さん」と呼称させ、擬似的親子関係を形成するやり方、または、保母を中心とした小集団制による母子家庭的な生活形態をとる方法などが戦災、引揚孤児が大勢を占めた時期までは基本的にとられてきたものである。

呼称はともかく、二十四時間制は原則と考られてきたところである。現在では、公立施設を中心として、交替勤務、複数担当による処遇へと転換をとげている。勿論、職員自身の労働再生産と人間性回復のために労働時間の規制、休養の確保は当然のことであるが、低年齢児童の場合には、その情緒的安定のためには、一定の人間関係を必要とするし、強い感情の交流がなければならない。自然な生活形態と人間関係による養護が、民間施設においても次第に困難になっていく傾向にある。ともあれ、従事者の生活あるいは権利の確保と児童の人間性発達を保障することとが、二律背反的にならざるを得ない状況を認めなければならない。そこで、夫婦制家族養護寮として小集団化し、養護施設と里親家庭との中間的形態が考えられる。ごく一般的に夫婦の一方が家庭養護に専念することで自然さを取り戻そうとする。それには、住宅条件、必要経費にしても、それ相当な設備と予算を用意して、すすめなければならない。制度的に行うならば、篤志家の犠牲を強いる結果になるような、これまでの民間依存の安上り行政的な感覚で行なわれてならないことはいうまでもない。

五

社会福祉施設には、その大規模化と共に、地理的、社会的に隔離化されていることに対する反省と批判がたかまっている。ここには障害のある人達の生活環境として、整備された条件のなかで暮らすことが幸福であるということ、コロニー建設に重点がおかれた時期もあったのである。そして六十年代後半から七十年代にかけて、国ならびに都道府県による大規模な重度心身障害者のための施設がつくられていったのである。その建設地は完全に人里離れた場所に、障害をもった人だけのための地域社会を出現させたわけである。これに対して一方では、障害者の生活の場を一般社会の中にあつて、その協力と理解の上でなされねばならないとし、障害をもつても生活できるシステムを社会がもつべきだとする思想も強くあらわれ、都市構造においても道路の段差解消、スロープの採用、公共施設建物、交通輸送手段（電車、バスなど）にも改造を達成させていった。そして、今もなお世間体から障害者をかくそうとする傾向も強いけれ

ども、一方で通所、通園によって地域での障害児施設、授産、作業所を利用する形態もとられるようになってきている。また老人問題にあっても、老人ホームなどの収容から、生活能力に応じて、自らの生活根拠地たる地域社会で暮らせるようにするという居宅処遇の原則が、老人福祉の基本であるとするようになってきている。地域社会の福祉サービスの組織化と提供システムを形成するという、コミュニティ・ケアという理念と方法である。

ここには、特に障害者にとって差別されない、隔離されないというノーマライゼーション（普通化）の要求があり、また老人福祉にあらわれてきた、積極的に老人の生活を包み込んでいく、すなわち年老いて身辺介護を必要とすることは当然前で、厄介者扱いにしてしまうことのないようにする―人間、誰にでも発生する事柄なのだから―インテグレーション（統合化）していくことで、社会的な統合と安定をはかる必要があるという思想である。

六

このように社会福祉の分野には、安定感を回復するた

め、自然環境に大きく依存せざるを得ない部面がある。情緒障害児や、精神障害者の治療には、刺激遮断と共に、自然に恵まれた環境条件による生活療法ともいうべきものが大きな役割を果たしている。また養護を受けられない環境にある児童にとって、自然な感情の交流が得られる人間関係を成立させることが基本となる。すなわち、ケア（援護）を必要とする場合には、自然をとり戻す本来の関係とあり方に返えすことが求められる。この場合は、親子関係において充足されるべき身の廻りの世話、躰、愛情が与えられるといった本質的なものといった意味をもっている。あるいは、老人福祉などでは、人工的、人為的な施設処遇に対して、日常的な生活を保障するのは、本人の住みなれた地域社会でしかあり得ないとする考え方もある。そこでは、施設での生活を非日常的なものとして拒否する姿勢があらわれてくる。また障害者だけで生活が完結し、維持されるコロニーに対して、隔離し、隠蔽するものだといったとらえ方が生まれていることにも注目しなければならぬ。社会福祉をめぐる自然と人間の営みにかかわる捉え方の変化に、社会福祉思想と実践の歴史をみることができるのである。

特別寄稿



ある念仏者のアメリカ抑留生活記（下）

窪川 信 丈
くぼ かわ しん じょう

（東京・浅草竜宝寺住職）

私が僧侶であるためか、やがて彼も幾分安心したらしく、思いがけないこの抑留生活のにがい体験を訴え、最後にこんなことをいった。

「実は、私には、母と妻と二人の子供があるんです。母が、三年程前から病床につき、だんだん悪くなってきたところへこの戦争騒ぎです。重病人をかかえ女と子供ばかりで、一体どうしているかと思うんです。それにお互いに、いつどうなるかわからないと思うと、居ても立ってもいられないのです」

せつせつと断ちがたいこの恩愛のきずな、いや彼ばかり

りではないここにいる誰もが、突然大きな不幸にぶつかって、まるで糸を切られた風のように、心の安定を失っていたのだ。しかし、私は、これが裸になった人間の弱さであり、本当の姿であると思った。その瞬間、私は冷たい夜風が、首すじを痛く吹き抜けてゆくようないい知れぬ心細さを感じた。

ふと気がつくと、私の手は、いつかしら念珠を、ちぎれるように堅く握りしめていた。

「あなたの苦しみはよくわかりますが、しかしこの戦争の続くかぎり、どんなにたくさんの方があなたのような

苦しみをうけるかわかりません。これもみんな前世の約束というか、その人の持つ因縁なのです。

だれ一人、望んで不幸になる者はない筈です。この頃あなたは、食事もとらず夜も眠らないで心配しているようです。それが果して、あなたの家族の人達の仕合せになることでしょうか？ 人間は誰でも、自分で自分をどうすることも出来ない場合があります。そんな時はあせればあせるほど、もがけばもがくほど、かえって結果は悪いのです。私も、さんざん苦しみました。この頃では、すっかりあきらめて、なにごとも如来さまにおまかせして、お念仏を申していますが、不思議に気持ちが落ち着いてくるのです。お互いに、今後どうなるかもわからず、またどうすることも出来ない今の場合、私達はじっと我慢して、静かに、時の流れを見つめてゆくよりほかに道はないと思います」

私が、念珠をそっと彼の手にかけてやると、彼は幾分でも気持ちがやわらいだのか、

「すいませんでした。有難うございます」

ポツリといい終ると、私の手を堅く握って、幾度も礼を述べ、静かに私のそばを離れて自分のベッドへもぐり

こんでしまった。

こんなことがあってから、E氏と私は、食事も仕事も肩を並べてするようになり、やがて彼も日増しに元気を回復していった。

或る日、私が、木の実で作った自製の念珠を彼に見せ「あなたの手にかけて下さい」というと、彼は、「私に下さるのですか」といって、子供のように喜んで合掌して見せた。

正月に入ってから、E氏のような人達のために、監督官の許可を得て、毎夜、夕食後の一時間、各テントを訪問して説教し、膝を交えて語り合った。

ややもすれば、苦しみと哀しみに押しひしがれるような暗い抑留生活の中に、一声でも多くの念仏の声がきこえてくるということが、私の生涯の最後の生き甲斐のあるひとときであった。

三月十四日、午後六時、時には砂をかむような、また時には、み仏の光に浴するような、さまざまな思い出をあとに、私達、百七十名は、アメリカ大陸への護送船に乗せられて、サウンドランドを去ったのである。

船は、初春の麗らかな陽光に映える紺碧の海上を、一

路、米大陸に向って進んでいた。

昭和十七年三月十八日、奇しくも洋上に、彼岸を迎えたその時の嬉しさは忘れられない。

明けて十九日の夕刻、サンフランシスコに上陸、大陸への一步を踏みしめたのである。

三月二十四日、私達を乗せた列車は、広漠たる米大陸の原野を縦断して、ついに、カナダ国境に近いウイ斯科ンシン州のマッコイ・キャンプに到着した。

かみ合うように屹立した山並も、空を突かんばかりに高くそびえる松、杉の大木も、なにもかも、真白い雪に蔽われていた。常夏のハワイに慣れていた私達にとって零下二十度を越える寒さは、身にしみてこたえた。

しかし、キャンプ内は、一日中、ストーブの火が燃え続け、ひえびえとした私達の心を、またからだをやわらかく暖めてくれたのである。

四月八日の釈尊降誕会には、一同揃ってキャンプ内に集まり、誰かが人蔭で器用に作った小さなお釈迦さまを壇上に祀り、甘茶のかわりに紅茶をかけて、遙かに故国をしのんだ。

また、四月二十九日には、天長節を祝って、一同元氣

よく君が代を合唱した。日本人の気持を理解して、反対どころか大賛成だといってくれた監督官が、「もっと元氣を出しなさい」といわんばかりに、遠くのほうから盛んに笑顔で応援してくれたのがなによりうれしかった。或る日、山中で作業中、三人の米人の猟師に出逢ったが、彼等は、私達を捕虜と知りつつ近ずいて、握手を求めた。

「皆さん、本当にお気の毒ですね。残念ながら、アメリカと日本は、いま戦争していますが、私達は、お互いに同じ人間として、仲良く助け合いましょう」といいながら、彼等は朗らかに笑った。

五月二十八日、雪どけの山肌に、美しい青葉の光りが照り映える頃、私達は、ようやく慣れてきたマッコイ・キャンプを去り、ウイ斯科シン平原を、一直線に南下して、シカゴを通過、更に、南へ、ケンタッキーの青野原を縦断して、ついに、テネシー州の、フォリスト・キャンプに到着した。寒いロッキーマウンテンから、急に炎熱の地に移ったため、当座は、病人が続出した。

ここで、私達は、抑留後始めて憂うつな鉄柵生活を送るようになった。

ところが、六月二十日、日本から指命された数名の人が第一回交換船で帰国することになった。いよいよ出発の時になると、送る者、送られる者、万感こもこも胸にせまって、別離を惜しんでいた。

七月初旬、私達は、このフォリスト・キャンプを去り更に西進して、ミシシッピー河を渡り、ルイジアナ州のリビングストン・キャンプに移された。

ここは、前のテネシー州よりも一層暑く、太陽の直射光が、まるで、肌を刺すような熱帯地だった。

七月の盆供養がすんだ頃、各地から送られてきた捕虜の中に、特別な棟で独居生活をしている一人の青年があった。終始無言の彼は、柵をへだてて、時折、私達と会釈することはあったが、誰とも話し合う様子は見えなかった。私も、絶えず、この不思議な青年の挙動を気にかけていたが、或る朝、散歩の折、ふと話しかけると珍らしく彼は重い口を開いて、孤独と狂気に悩むあさましいまでの自分の苦悩のすべてを打ちあけてくれた。

「私は、真珠湾攻撃に参加した特殊潜航艇の一員ですが戦闘中、敵の爆雷にやられ、人事不省になって海上を漂流中、ついに、米軍の捕虜になってしまいました。

一時は、殺せともいい、自決もすでに何回も計ったのですがみんな失敗に終わりました。彼等は、なにを思つか親切によく面倒をみてくれます。しかし、いまの私にとって、かえってそれがつらいのです。もう半年もの間こうして、毎日、死ぬことも生きぬくことも出来ないで悩んでいる有様です」

なんという、地獄のような苦しみであろう！

この気の毒な青年も、かつては、選ばれた立派な帝国軍人であった筈である。私は言った。

「人事をつくして天命をまつというか、あなたの場合、たとえ捕虜になったとはいえ、それは決して、あなたの罪でもなければ、また、不忠でもないでしょう。

私は、あなたが、ふたたび生き返ったのは、一に、み仏のおはからいと信じています。過去にとらわれず、今日を立派に生きぬいて、もう一度、お国のため、社会のために、ご奉公して下さい」

じっと眼を閉じて、私の話をきいていた彼は、最後に沈痛な顔を心もちやわらげ、黙って、うなずいてくれたのである。

その後、彼は、間もなく、私達一同と別れることにな

ったが、私は、心から彼の再出発を切望し、前途の多幸を祈ってやまなかった。

この捕虜第一号といわれたS少尉が、終戦後、日本に無事帰国され、故郷の九州で立派に活躍されていることを知り、ひとの運命のふしぎさを痛感した。

炎暑に悩まされた抑留二年目の正月も、いつしか過ぎ一喜一憂、あわただしい生活のうちに、早くも一年が夢のように過ぎ去った。

いつも、就寝時に念仏をとる私の習慣も、当初は「縁起が悪い」と猛烈な周囲の反対をうけたものであるが、次第に同行者がふえるようになり、一年後には、一同大賛成で合掌して安らかに就寝するようになった。

戦局の推移は？ 自分達の運命は？ 家族の安否は？ 片時も脳裡を離れぬこうした疑いの中に押しよせる不安な気持は、次第になにか苦悶のはけ口を求め、心の慰安を渴望する結果となり、やがて、それが、お互いの発奮ともなっている。

一週に二回ずつ集って、各宗僧侶の説教、または、戦歿者の慰霊祭が行われ、仏教学、神学の研究に精進し、或いは、スポーツ、園芸に没頭し、時には、各自が苦心製

作した絵画、彫刻の展覧会等まで開かれた。

こうして、昭和十八年十月二十三日、第二回交換船のメンバーに加わり、私も、ようやく帰国する機会を得た。

省みれば、短かいようでもあり、また、果しなく長い月日のようでもあった。

歳すでに七十歳を迎え、いつしか白髪頭と化した頭の中を、走馬灯のようにめぐるさまざまな思い出、それは私の生涯を通じて、忘れ得ぬ貴い体験であったが、その一切が、なにもかも、念仏の声に援けられ、み仏のお慈悲に生かされていたことを思い、ただ有難く感謝の念仏をとる。となえながら、アメリカを去ることが出来たのである。

そして、帰国第一歩を、横浜の埠頭に踏みしめた瞬間、あまりの感激に言葉も出なかった私であったが、「なつかしい故国のみなさん！これが私のおみやげです？」

そう心の中でつぶやきながら、左右のポケットの中に残された九セントと、いくつかのチョコレートを手でかたくにぎりしめていた。

(完)

随想——朝の歌

江^{ごうの}目^め達^{たつ}雄^{ゆう}

(山形市迎接寺住職)

毎朝六時に梵鐘を撞きはじめてから、九年余りになる。雨が降っても風が吹いても、毎朝いちどは鐘楼に登った。私が留守のときは、家内が替ってくれた。

いまの鐘は、梵鐘・仏具などの鑄造を専門としているSさんが、前の鐘を鑄造して納めてくれたものである。前の鐘は、戦後間もない時期に造られたもので、すこし小ぶりのうえ、音色もやや、硬い感じであった。新しい鐘は、目方も百貫をこえ、音響も吟味された。

私は、Sさんの折角の芳志にこたえる気持で、毎朝鐘を撞きはじめたのである。そのときは、いつまでも続け

ようというつもりは、格別なかったと思う。しかし、早朝鐘をつくという日課は、日々の生活に新しいリズムをもたしらしてくれた。それに、鐘が納ったのは五月のなかば、この地方ではいちばんいい季節である。朝の目覚めも快よかった。

冬に入ると事情はちがってなる。午前六時はまだ暗い。夜明け前の寒気が身にしみる。雪の朝などは、すぐ目の前の鐘楼に、身ごしらえをし雪をかきながら、登らなければならぬ。吹雪が遠慮なく吹きぬける日もある。しかし、いまさらやめるわけにはいかない。

「毎朝六時では大変でしょう。冬のうちだけでも、一時間くりさげて七時にされたら……」

と心配してくれる人もでてきた。

「お寺の鐘に夏時間や冬時間があるのもおかしいし、頑張って六時をまもりますよ」

私は、こんな返事をかえした。

鐘を撞きはじめてから一年ほどすると、「吹雪のときなど大変だったでしょう」「毎日よく根気がつづきますね」というような声を、よく耳にするようになった。

「お寺の鐘になると、市場に仕入れに出かけることにしています」

ある魚屋の主人は、こう言って干魚や刺身などを、ときには届けてくれた。

「鐘といっしょに、散歩に出るのを日課にしています。

おかげでこの頃調子がいいんですよ」という人もいた。

朝の鐘は、いつの間にか、まわりの人々のくらしのリズムにも、一枚加わっていたのである。

× × × × ×

私のお寺があるのは、「銅町^{どうまち}」というところである。

銅町は、その町名からも察せられるように、昔からの鑄物の町である。

銅町鑄物がいつの時代からのものかは、確かな記録や遺物もいまのところ見つかっておらず、不明な点が多いようである。この町の言伝えでは、前九年の役の康平年間、源頼義の遠征軍に従って、京都から若干の鑄物師がやってきた。そのうち五人が、戦いの後もこの地に残り、銅冶町^{どうや}と称した。これがこの町のそもそもの起源である、と言っている。いまから九百年前のことである。

これに対し、東北辺陲の出羽の国に、そんな昔から鑄物師がいたとは考えられない。もっと時代はくだるのではないかと、この伝説を退ける人もいる。一方、出羽の国の南部は、前九年の役では遠征軍の後方陣地として、何らかのかかわりをもったとみられる。「源頼義云々」はともかくとして遠征中の兵器や器具用品の修理補給のため、鍛冶師や鑄物師が随従したことは当然ありうることだ。言伝えを一概に虚説とすることはできない、という人もいる。

銅町発祥の伝説が、史実を伝えるものかどうかは勿論明らかでないが、この町の鑄物の歴史がかなり古い時代は遡ることは、間違いないようである。

銅町の鑄物製品は、以前は神仏具や鍋釜・鉄びんなどの日用品が主であった。現在は、電機具・自動車部品などの機械鑄物が生産面の中心となり、手工業から近代工業へと変った。しかし、茶の湯釜や青銅器などの伝統的な工芸品も、全国的に高い評価をうけており、すぐれた鑄金工芸家も数多い。殊に近年は、若手の作家が相ついで抬頭し、この町の伝統的な特異な風土を感じさせているのである。

銅町鑄物が、隆盛の基礎を固めたのは、慶長年間頃ではないかとみられている。即ち、山形城主最上義光（がみよしあき）の時代である。

最上義光は、風雲に乗じて出羽内陸一帯を統一制覇し、関ヶ原合戦後は庄内三郡や秋田由利郡までも領有した戦国武将である。最上氏の最も盛んな時代は、表高五十七万石、実高百万石であったとも言われており、東北随一の雄藩であった。

義光は、山形城の大規模な拡張を行なったが、その壮

大な築城について、城下町の整備を実施している。居城三の丸の東側に商業市場街を配置し、さらにその東側に各種工業生産の職人町をおき、諸役免除地として保護集中をはかった。この最上時代の都市構造は、いまでも山形市の中央街地の骨格をなしているのである。

銅町は、この義光の城下町整備によって、現在地に集団移転したのであるが、その時期は慶長九年頃と考えられている。新しい町は羽州街道に沿う交通上の要衝でもあった。地の利と、出羽百万石の城下町の繁栄に支えられて、銅町鑄物は大いに繁昌するようになったのである。

授手山（じゅしやん）迎接寺が、この町に開創したのは慶長十三年、銅町がここに移ってから四年目のことである。おそらくこのお寺は、当時の鑄物師たちによって創建されたものであるろう。鑄物の町の基礎を固めた鑄物師たちは、人々の心のよりどころとして、お寺の建立を相計り、土地を求めて堂塔を建て、開山には、隣の町鍛冶町浄光寺にあって高德の誉高い良賢靈山上人を招請したのではなかったかと思う。良賢靈山上人は、名越派故本山磐城如来寺の伝灯に属し、文禄三年浄光寺を開山、ついて迎接寺開

山、寛永十年法寿百九才を以て寂すと伝えられている。迎接寺開山の頃は、すでに八十才をこえる老僧であったわけである。

迎接寺は、草創の当初からこの鑄物の町と深いかわりがあり、以来今日にいたっているのである。そのお寺で、この町で造られた梵鐘を日々うち鳴らすのも、当然の因縁というべきであろう。

× × × × ×

話は替わるが、一月余り前のことである。はじめての老人から電話を受けた。その老人はもう四十年余りも、下半身不随のまま病床に臥しているということだった。「私は、家族や身近かな人たちのおかげで、こうして四十年余りもすごしてもらってきました」

電話の声は、まずこう語ってから、

「私の毎日の生活に、生きるよろこびと安心をあたえてくれるのは、毎朝のお寺の鐘を聞くことなのです」というのである。

「朝、鐘の音を聞くと、なんともいえず心が安らかにな

ります。病床で鐘を聞きながら、私は祈ることにしています。私のような病いで苦しむ人がもういませんように、世の中の人々がみんな仕合せでありますように、そう仏さまに念願します。鐘が鳴り終るととても安らかな気持ちになって、一日を送ることができます」

電話の声はさらにつづけて、

「和尚さんがお留守のときは、奥さまが替るのですか。鐘の音色で、ああ今日は和尚さんがいないんだなとわかるんです」

とつけ加えた。

鐘を撞く者の心の中まで、この病床の老人は耳ざとく見抜いているのだろうかとも思った。

毎朝、鐘を撞く。

まことに単純な行為である。しかしその鐘の音を、さまざまな思いをこめて耳を傾けている人が、外にもいるのかもしれない。

あと何年、私は鐘を撞きつづけることができるかはもとよりわからないが、この小さな日課を大事にしたい、と今は思っている。

〈民話シリーズ〉

持ちつ持たれつの餅



谷^{たに}川^{かわ}のぶ也^や

(郷土史家)

「ああ、今年も残りわずかとなってしまったなあ、それにしても、よく食いつないできたもんじゃ」

「そうですね、これも父ちゃんのおかげですよ」

年の瀬も押し詰ったある寒い日、清助夫婦のつぶやきが、うす暗い部屋からもれてきました。それもそのはず、清助夫婦は育ち盛りの五人の子供たちをかかえた、その日暮しの貧しいお百姓さんだったのです。

もちろん自分の田畑はありません。豪農のもとに働きに出て、そこで得たわずかな収入をもとに、一家七人が食べつなぐという生活ぶり。食べ盛りの子供たちにも不満はありました。腹いっぱい食べさせてもらったことがなかったからです。

そんな子供たちにとって、一年のうちで一番待ちどお

しい日が近づいてきました。

師走の二十八日。

この日は、清助が一年でただ一度だけ碗飯振舞をする日だったのです。日頃、十分に食べさせてやれない子供たちに、せめて正月の餅ぐらいはと、清助がやっと集めた餅米に、粟や稗、胡麻や唐黍などを混ぜ合せ、少しでも分量を多くした餅をつく習慣となっていました。

「それにしても今年はよわったな、秋の嵐で収穫量は減るし、十分な量が確保できなかったからなあ」

「でも、子供たちはたのしみにしてますよ、少しでもいいですから、なんとしてもつきましようよ」

「そうだね、つかんわけにはいかないし、まあ、なんとかなるだろう。明日は早いから寝るとしようや」

翌早朝、はしゃぐ子供たちをたしなめながらの餅つきが始まりました。

杵を打つ父、合いの手を入れる母。〃ペツタン、ペツタン〃、つく音に合わせて小躍りする子供たち。それはにぎやかな餅つきでした。

しかし、調達した穀物が少なかつたため、あつという間につきあがってしまいました。

「父ちゃん、今年はいつもより少ないね、どうして、つまんないや」

子供たちは異句同音に父親に尋ねました。

「すまんなあ、一生懸命がんばったんだが、思いどおりには集まらなかったんだよ、これで我慢してくれや」

今の生活ぶりから考えれば、これが精一杯というところであるが、子供たちにとっては一年でただ一度のたのしみの餅つき。親として、力の至らなさを、ただ悔るばかりであった。

その時です。

「ごめんくだされや、ワシも餅つきの仲間に入れて下さらんかのう」

いつ入って来たのか、声のするほうを見ると、うす汚

い身なりをした老婆が、背中には大きな風呂敷包みを背負って立っておりまして。

「なんだいお婆さん、もう餅つきは終ったよ。お前さんに分けてやるほど餅はないし、かわいそうだが帰って下さらんかな」

「いや、ワシは帰らんで、餅米ならここに仰山持ってきておりますで、お前さんたちにも分けてやろうと思ってじゃよ」

老婆にいうが早いか背中中の包みを土間に降ろし、それを開きました。中から出てきたのは取りたての餅米、それも少しばかりではありません。よくもこれだけ背負ってこれたものだというほどの分量だったのです。

それまで冷やかに見ていた清助は、急に態度をかえ、老婆に尋ねました。

「これは、これは、どちらの大家のご老女か知りませんが、ようこそおいで下されたさあ、そこはお寒いから、もっと中にお入り下されや。ワシにはなんの取り柄もないが、力だけはだれにも負けません。お望みとあらば餅をつきましよう」

再び餅つきが始まりました。しかも夢にまでみた餅米

だけの、なんの混りものもない餅つきですから、一段と力が入りました。そして、粘り気のある餅が見事につきあがりました。

「これはどうもありがとう、ワシの力ではこうはいきません。年老いたワシにはこれだけあれば十分じゃから、あとは子供たちに食べさせてやって下されや」

老婆は、ほんの少量の餅を取り、大部分を清助一家に与え、さらに言葉が続けました。

「これから毎年ワシの餅については下さらんか、二十八日には必ずまいるから、ひとつ約束して下されや」

「結構ですとも、子供たちのたのしみが、また一つできました。ほんとうにありがとうございました」

「そうか、こちらこそありがとう。暮れの二十八日じゃで、くれぐれも約束を違えるではないよ」

老婆は、そう言い残すといすことなく立ち去っていきましました。

そして、一年。

老婆は約束どおり、二十八日の清助一家の餅つきにやってまいりました。身なりは、やはりみすばらしいままでしたが、餅米の量は昨年よりも大目でした。

清助が用意した混り餅と、老婆が持参した純の餅はまたたく間につきあがりました。

「お手数かけたのう、どうもありがとう。よくこの一年がんばってこられた、お前さん一家にはこれからよいことが続くはずじゃ、慢心せずになんばりなされや」

老婆は、昨年と同様、少量の餅を持つや、

「暮れの二十八日じゃ、よいな」

と付け加え、立ち去っていきました。

こうして、十年の歳月が流れました。

老婆は、毎年、暮れの二十八日には、約束どおり餅米を背負って来ては、少量の餅を持って立ち去りました。

この十年間、老婆の予言が当り、清助一家の生活は大変貌をとげ、富裕なものとなっていきました。もちろん清助の真面目さが認められたこともありましたが、手伝いに出ていた豪農に絶大の信頼をよせられ、子供のなかつたこの豪農から、亡きあとの財産の贈与が約束されておりました。

そして、十一年目の春、豪農は清助に後事を託し、この世を去りました。

一躍大尽となった清助。生活ぶりも急変しました。

それまでの清助は、十年前までの貧乏な生活が身につくき、なに一つぜいたくはせず、困った人がいれば手を貸し、物品を分けてやったりしましたので、人々から尊敬もされておりました。

ところが、実際に富を手に入れたことにより、そうした行為は一変しました。分け与えるどころか、一層富に執着するようになったのです。他人にかげ口をたたかれても一向気にせず、執念と思えるほどに富の蓄積につとめたのです。

そして、自分が他人に与えているものが他にはないかというわけで、総点検に入りました。ときに年の瀬もせまった二十五日でした。

「そうだ、あの婆さんがいる。ここ二、三年、ひとにぎりの餅米を持って来ては仰山の餅を持って行きやがる。これも惜しいから、二十七日についてしまおう」

清助は、十余年続けてきた恒例の二十八日の餅つきを、一日早めて行なうことにしました。そして、十年前には想像できないほどの分量をつきあげたのでした。

翌二十八日。そんなこととは知らず、老婆は、曲りきった腰に杖をつき、やっとの思いで清助の豪邸にたどり

つきました。身体をささえる杖を持つのが精一杯で、餅米は一粒も持っておりませんでした。

「清助さん、ワシじゃ、餅つきはどうした、まだやらんのか、どうしたわけじゃ」

「おい、婆さん餅つきは昨日すませたよ、乞食婆さんにくれてやる餅なんぞないわ、とっとと失せろ」

それまでの恩義からは想像もできないような罵声が清助の口から発せられました。

その時です。その言葉を待っていたかのように、老婆は薄笑みをうかべ、静かな口調で語り始めました。

「約束を違えたな、それもわずかの餅を惜しむために。ワシは餅なぞほしくて毎年来たのではないわい、お前の生活ぶりを確かめに来たのじゃ。そして、ないものをその翌年与えてやったのじゃ。それも知らず哀れなヤツよ。持ちつ持たれつの餅もこれまでじゃ」

老婆の姿を見たのはこれが最後でした。

その後の清助の生活ぶりは、何をしててもままならず、一年もたたぬうちに十年前の状態に逆もどり、それどころか、だれからも相手にされない、それは哀れこの上ない生涯を終えたということです。

■善導大師の生涯とその教え■

——二——

◇ ◇ 善導大師の時代 ◇ ◇

○

善導大師が誕生されましたのは、隋の煬帝大業九年（六一三）といわれます。隋の時代は大師が誕生されてのちわずか五年にして亡んでしまい、唐代に入ります。そのため大師の一生はほとんど唐の時代であるといえます。わたしたちは、「大唐善導大師」と申しあげますが、唐代三百年の間は、中国文化史上の精華であり、とくに善導大師が出世されました唐代のはじめは、中国仏教史上の黄金時代といえることができます。

さかのぼって中国の歴史をふりかえってみますと、昔、中国は南北二つに分裂していました。いわゆる南北朝であります。南朝は中国人の国土であり、北朝は侵入

してきた蛮族が国を建てたものです。人種が異なる両朝の間には常に闘争がたえることなく、対立はおよそ百五十年も続いたのであります。長い分裂対立の南北朝が、はじめて統一されたのは、実に隋の時代、高祖文帝のときでありました。

その頃のわが国は崇仏派の蘇我馬子と、排仏派の物部守屋の争いがあり、崇仏派が勝つて、仏教興隆の道が開かれようとしていたときです。日本にあらたな文明の曙光がきざしはじめた頃であります。日本から中国へ、すなわちわが国の聖徳太子の国使が隋の国を訪問したのは、隋統一後十九年であります。この六年のちに善導大師は誕生されております。

隋三代煬帝のときは、領土も四方に拡大されて国運も

発展しましたが、一方では、万里の長城とならんで、世界最大の土木事業であるといわれた大運河の建設をなし、その沿岸に離宮をつくり、豪華で贅をつくした王であります。また他方では、朝鮮半島に軍を動かして戦をいどみ、莫大な財と兵を失ってしまったのです。

漸く隋にいたり天下は統一されましたが、民衆は塗炭の苦しみにあえぎ、戦乱のたえまを知らない状態でした。折角の統一国家もわずか三十年に亡ぼされ、唐の国が統一することになったのです。

唐二代太宗皇帝は、中国の歴史上第一位の名君主とよくいわれます。在位二十三年は、いわゆる「貞観の治世」と讃えられますが、太宗の即位は、善導大師十四才のときであります。国内は平和で豊作がつづき、諸国は唐国の威風になびき、まさに大唐帝国は泰平を謳歌したのであります。むかしの長安の都は、整然と都市計画がなされ、朱雀大路が都の中央を南北に通じて左街右街の二区に分けられており、美しく街路樹が植えられて、そこを青牛白馬や立派な乗りものが往来し、人びとが闊歩している様が伝えられています。また長安の都には、あらゆる国の人びとが集まり来たった、いわゆる政治、経

済、文化の中心地であったようです。

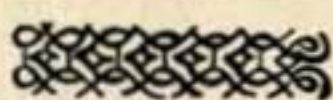
当時、長安には、百余の仏教寺院があり、仏教以外のほかの宗教も多く布教活動をしていました。長安の都の宗教界の実状は、かならずしも仏教のみの独占時代ではなかったのです。仏教と対抗したものに道教がありま

す。いうまでもなく、老子を教祖と仰ぐもので、最初、不老長生の術や占卜、禁呪の法などの民間信仰が、やがて仏教に刺激されて宗教として完成してきたものです。このほか、ペルシャのゾロアスターが開いた二元教の祇教とか、コンスタンチノーブルのネストルが唱えたキリスト教の一派である景教などの外国からの宗教も、当時の宗教界に教線を張ったのです。

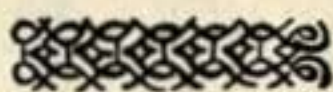
かように、この時代は長い間の戦乱も一応治まり、天下泰平で、しかも豊年つづきで、その上宗教や文化全般にわたって、名君主太宗、高宗によって保護された、いわゆる唐文化のもっとも爛熟したときともいえます。その時代に善導大師は出世されて青年時代を過ぎたのであります。

(宮林昭彦)

浄土句集



一田牛畝選



福岡 高良 慈風
お十夜の如来さまより善の綱

群馬 島津 か寿

万葉の詩を偲ぶや草紅葉

京都 藤堂 恭俊

まどろみて旅のはなしの夜ながかな

福岡 行正 明弘

ねむたさの子が膝に来る夜なべかな

京都 安藤 寛

亡き父の声ぞと聞きし十夜鐘

評 第一次浄土宗代表友好訪中団員として

評 子供は母が寝るまではなかなか眠らな

中国の旅のくさぐさはなしをしている
のである。作者は二度目の中国の旅との
ことである。石壁の玄中寺や終南山の善
導大師の墓塔等、秋の夜長の話もなか
なかつきぬらしい。

い。母が縫物の夜なべしていると膝に
来るのである。子に膝枕させて仕事して
いる母がよく写生されている。

大分 丹羽 難中

方丈の戸を開けはなち月を待つ

東京 猪瀬 幸子

衣被日蝕の刻うつりつつ

東京 栗原やえ子

縁にかけ月の出待ちつ衣被

東京 原口 敬子

笑顔にてそろうなじみの十夜かな

福岡 荒牧 還愚

名月の上り一瞥明かるうす

東京 真野よし子

評 秋の彼岸に逢って、今度は十夜に揃っ

た念仏同行衆。みんな元気で、嘸ぞかし
拝み合ひつつ笑顔をかわし合っているの
はまことにほほえましいものではある。

山荘の軒端の風はすでに秋

東京 真野 竜

はまことにほほえましいものではある。

言の葉をつなくカクテル夜永かな

三重 森 静枝

七夕や園児のねがいたとたと

隠れゐる寝墓めぐれる曼珠沙華

大杉の上に明月かつりけり

福岡 前田 秀峰

岩手 小川無為窟

足ずりて庭に再び夜半の月

秋めくや浄土の思ひしみじみと

新築の家をつぶせし台風禍

福岡 永江 隆子

山形 松田 允子

鳥渡る太白の辺に透きゐたり

曼珠沙華道守地藏黙然と

折からの風に白萩乱れけり

福岡 権藤みきを

東京 阪入志津枝

穴まどひ子等走らせて隠れけり

草の実の色つき鳥の影はしる

僧一行牡丹の縁にくつろぎぬ

福岡 新森 耕爾

東京 栗原とも子

椎の実を拾ふひとりの気安さに

水引草古き館の垣越しに

酒の味おぼえし妻と月を見る

福岡 堀 松月

東京 鳥居 千代

秋雲や伊賀の山並み高からず

ゆっくりと香立ちのぼる秋彼岸

男子には纏羽子板市に買ふ 一田 牛畝

広島 香月てい子

朝霧にお百度踏んで娘の願ひ

吟行や心ときめく秋の曇

東京 新井 新生

東京 遠田念悦坊

双盤のこだま流るる秋の風

月の句の便を呉れし死刑囚

福岡 国友 星畝

◇「浄土句集」欄へ!!◇

ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10―14

正定寺 一田 牛畝先生宛

〇〇江戸後期の宗門歌人〇〇

良洗上人の研究 (四)

よし だ こう がく
吉 田 光 覚

(岩手県紫波町極楽寺住職)

(三) 無常・懷旧・釈教

天保乙己の良夜、師のいたつきに以玉ふ枕辺に侍りけるにや、よさうし明はなてと申されて端近う居り給ひ、月はくもりたれと兼て願ひし今宵なれはとて、おのれに筆とるへきよし命させ末期の詠を誦せられける。

閑さや さし入る 月を松の庵 (石翁辭世)

窓の下よりすやすやと寝入玉ひにけり。もはや終焉の期も近かり給へるにやと思ふにつけても、こしかたゆくりなく風雲の街にさまよひし身の、罪をくやみ去年の此頃、桑折の里大安寺法囑に錫を移せし後は、長く御心をも慰めまゐらせんこと、こころしらひし滋味錦褥もかひなき業なりけりなと、思ひくつつをつつ夜を明して、

立さはく 雲はこなたに 月更ぬ 孫阿

栞棋插花のたくひ、其遊技世におほいなれと老後の娯楽は風月にしかじなど、幼児に示されしも今さらのやうに思ひ出られて

菊見ても 楓をミテも なみだな 孫阿

正に安養界に旅立たんとする老師、永別の悲哀にむせぶ遺弟の心境、その夜の差迫った情景が、『東桜集』に見える。記すべきや文、遺すべき哉、弁世の一句、須らく僧侶はかくありたいと思う。

(乙己の良夜は弘化二年旧八月十五日即ち仲秋の名月)

此葉月の始のころよりいささか悩ありとてふし給ふ程



にもあらさりしを、望の頃よりこそいたう重き枕に傾き
給ひしが、其以待といふ日の暁かたに、つひにはかなく
なり給ひければ、

かへかたきけふの今はをしら雲の

よそに過さはいかにかもせむ

石翁嗣
法遜阿

旧八月十九日、秋彼岸の入日、遂に往生の素懷を遂げ
られた。

観音寺十一世顯蓮社良威上人石翁祐昌和尚宝寿五十
五才

(四) 遺弟縁者の弔歌

すゑの法子祐定は、吾にはあに、師にはおとうとのみ
なしこ成しを、いつのとしよりめくみ養はれけるか、こ
とし十五才になりたれどいと穉きをあはれみ病床ちかく
まねき給ひ、おのれに法育すへきよし命し給ふ。

かくて祐定が手を取り給ひて、やよ勉めよや、つとめ
よ、こはわが遺経なりと苦しき息のしたよりの給ひしも
今さらのやうに思ひ出されて、

陰たのむのりの小草のすゑ葉にも

あはれやかくる苔のした露

終焉のみこと葉かしこみまをして

いく秋を経ともわすれし身にしみて

余るなさけの 露の云の葉 未弟祐定

この祐定も病弱なりしたため間もなく師の跡を追うた。

跡とるべきはらからの、吾に先立ちて泉下にいそぎける
を悼みて

すゑのつゆ本のしつくのならはしは

またとのみちと 今こそはしれ 出羽 阿部長翁

いかなれば吾すくせの縁逢て、いと稚かりし時、先立
教ふ大安前師超音上人の遺語によりて、此六とせほと
慈恩一毫をたも報ひ奉らさると亡骸にとりすかりて、

有明の 只身にしみる ひとり哉 遺弟祐昌

父観声院いまそかりしほとは、梵俗無二の交悟浅から
さりし石翁大とく明星一点の露と消給ふよし、朝のしら
せに愕て

あたし野や 光ると見しも 同じ露 青牛改 其牛

言の葉も 紅葉や花も 夢見草 三春釈千秋

誰かための 今は掃除や 残る萩 大安主良黄

石翁祐昌和尚本葬九月十二日導師大千寺英天和尙

花は野に かへりてもとの つゆの原

藤田 積英天

茶毘執行の日は、遠近の老若山にみち、街に溢るるも、師の道とくにこそと感泣衿をはらひあへず、

野も山に 降そそきけり 秋しくれ

遜阿

おちきみ法師、身まかり玉ふよし、告こし給ひけれと、遠く国さへ、へたたるおうなの身のかなしさは、

日くらしの声にもぬれておもかけの

うつらふ袖の かわくまそなき

祐定妹 豊子

いかにせむ むかへる道なき死出の山

天とふ雁よ つはさたにかせ

同人母 妙定

法のおほち石翁大徳、病いとおもく成給ひぬるよし、わが宮城野の草庵につけおこせ給ひければ、いそきまうのほりけるに、はや北邙の煙りときえ玉ひし事の悲しきあまりに

袖にのみ露のゆとりを残しおきて

秋にはいつこに くれて往にけむ

孫阿嗣法 祐国

九月九日、三七日のいむ日にあたりければ師の植おかれし前栽の、きくの花の咲みたれたるを見て、

むかしたれ契りそめむしら菊の

はなの千とせもたのまれぬ世を

遜阿

守一山主隣堂比丘、伊達院主絶三和尚を法明忌の逮夜に請して、

早稲の香をますはかりの 供養哉

遜阿

百期忌辰の宝塔を造立して、

雪なから みそるる袖や 家の前

遜阿

翌年二月墓参

この上や 梅も植たき 墓かまえ 白石釈還阿

父至誠齊にかはりて、

雨そそく 枝を手向ん 山さくら 唯野氏妙女

花けしや 苔んだうちに 墓参り

十歳法子 祐漸

墓のきく 白赤ましる つほみかな 八歳祐弁

玆で注目すべきは、上人の郷里、山形阿部一族の方々が揃って歌をたしなまれたことである。それは石翁尊阿両上人方の影響でもあったろうか。

(五) 秋懷旧の跋文（『東櫻集』雜）

石翁大徳は、おのれが学ひのはらからにて朝もよし、紀の若山なる春辺さく藤垣内大人の、をしへ子になむありける。現身の世にいまそかりける時、朝暮仏

につかへ奉るいとまのひまには、しき島の倭云の葉を
好み、其道にまめまめしくありければ、事にふれつつ
詠いてらるる口つきも、希しうはあらずなむ。しかあ
るのみにあらず、古へをしのふところさしふかく、国
津御史をたふとみ、年月に見て、雲ゐの雁の空におほ
え、魂幸ふ神代のいにしへより、中今に至るまでの、
天皇の御代の統々いくとせ天下を治め給ひ、その年
号はいくとせにて、改元などへにも物語られるにいさ
さむら竹、いささかもたかふふしなく、流るる水のと
とこほらすなむありける。さるほどに、この五とせは
かりよりこなた疸といふ病にて、つねにあつしくての
み過されけるに、いつとなく重りゆきて、弘化のふた
とせといふとしの、はつきの十日あまりここぬかとい
ふ日に、つひにはなくなりけると聞こそいといと
かなしけれ。

ここに大とくの法の弟、遜阿、御師をしたふ心さし
のあまりに阿多々良真弓思ひ起して、三年の魂祭り、
秋懐旧といふ題をまうけて、芦垣の間近きわたりはさ
らにもいはず、真玉つく遠方まで歌詩俳諧はさらな
り、ささぬ一言二言はかなき花さすわさまでも、こひ

もとめて霊前に捧げけるに、浜の真砂の数多く、伊予
の湯桁の十はた三そとかそへ、むれをよひ、たゆきま
てつとひければ、ことことには物しかたなくて、歌を
のみ今の藤垣内の大人にまをして、撰をうけ、点をあ
ひたる中のありかすはかり、梓にゑりて真折葛長く伝
わり、なり瓢久しくととまれらは、古家の数の忍ふ
草、ふるきをしたひて、今をしのふのくさはひとりな
りなむ。其よし書しるしてよとこひおこせけるに、峯
の椎葉しひていなひなんも伊加古山いかなれば、駒も
すさめぬ大荒木の杜の下草、みたれかましき云の葉
を、八十六翁内池永年しるす。

嘉永はしめといふとしの八月の日

内池永年は信夫伊達地方の産、本居大平の門下で石翁
と同門、大平門下では桑折産の安藤野雁が傑出してい
るので、尊阿上人とも交友が深かったと思われるが、上人
の著作中に野雁の歌が見当たらないのが不思議である。

(六) 良威上人三回忌追善行

先月二十一日、私は桑折町文化財保存会の招ぎをうけ
孝子之善之丞一代記講演のため出張の際、偶然にも県文

化財委員の梅宮氏から三十年前入手したという一枚の古印刷を見せられた。縦21cm横29cmの大版刷である。

長閑房追善書画詩歌連俳本会の題名で本月二十九日桑折駅西於大悲閣坊開筐不論晴雨四方稚君冀君冀貴臨。

表画以為題、詩文章臨席先生撰歌臨史軒盛吟社百舌鳥屋合撰俳足了庵一日荅晴霞庵大屋士由石室遜阿各臨席合撰透逸三才歌書俳書十客迄景呈上切晩秋二十日限不許別名当日出席諸先生短冊合五分線相撲透逸景と選者や景品等まで大会の内規が示され、更に参加者一千四十人の名が掲載されている。会主無礙庵孫阿、会礎北海亭泰山執事久保篤晃松翠一保細貝巴明差添盛吟社百舌鳥廼屋臨史軒と末尾にあり当日の盛況が目に見えるようである。東桜集には追福秋懷旧として六十三句載っているが、短歌の代表的なものを紹介しよう。

わかれにしその世悲しきゆふくれの

雲のはたてに 雁は集にけり 本居豊顚

ともに見てうちかたらひし昔たに

秋のゆふへは かなしかりけり 本居安蔭

ふりぬれとゆすれぬものを今さらに

もよほし顔の 鈴むしのころゑ 本居内遠
遠公一逝過三秋 不復向庭山得遊。
同社友人哀慕切 教傍觀者共懷愁。

処士定斉

○稿を了えて

以上私は良洗上人に就いて入手した数種の資料を基に、ほんの一分を紹介したに過ぎない。本当の研究はこれからである。幸いに拙稿にお目をお触れ下さった上方、願わくば良洗上人について御存じの方はぜひ御教示頂きたい。『東桜集』、『一解集』その外の資料、所有して居られる方を御存じでしたら御紹介の労を賜りたい。本稿は当県の小林文夫先生の御指導を頂いたことを感謝して一旦稿を結ぶことにいたします。

(完)

『浄土誌』の購読希望者、新会員のご紹介を広く
お願い申し上げます。新年度よりの新しい会員に、
どうか多くの方がお申し込み下さいますよう、心か
らお待ちしています。

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三國志

(五)

——法然とめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

後鳥羽上皇が久々で承明門院とかわす熱帯夜ミステリ
イの寝物語は続く。

平家の没落をいち早く見通した久我通親は、後鳥羽帝
の乳母だった藤原範子を、平家の出身である夫の能円か
ら奪って妻とした。

通親の「乗り替え」の素速さはこれが初体験ではな
かった。

さきに平家が抬頭し、平相国清盛を頂点に廟堂を支配
しはじめたころ、これまでの妻を捨てて清盛の姪と婚を

結んでいる。

その女性はハイミスで、誰からもかえりみられぬ醜女
であった。

「おのれの立身出世のためには相手かまわずだ。いと
い範子はあの博陸（通親の現呼称、関白の意）のために老い
の身で次々と子供を産まされた。死期を早めてしまっ
た。母が死ねば、こんどは帝の母后となった娘をねらっ
てくる」

そこで、後鳥羽上皇は声を吞んだ。じっと承明門院の
顔を覗きこんできた。瞳にきらついた嫉妬の炎が立つ。
「どうかなさいましたか」

承明門院は不安な表情で訊きかえした。

「そなた、よもや……」

「何でございましょうか」

「すでに父の博陸と情を交わしたのではあるまいな」
世間で周知の事実。

だが、後鳥羽上皇だけは未確認だったようである。

「滅相もござりませぬ」

承明門院はきっぱりと否定した。口が割けても養父との密通なぞ洩らすことは出来なかった。

「それなら、よい。だが、危い。ここぞとねらったら博陸は執念深く迫ってくる」

「……」

「ああいう男を退けるには……」

ミステリイがささやかれたのは、この直後だったであろうか。

亡きものにする以外はない。

その方法として、上皇は豊富な中国古代の知識を披露に及んだのかも知れない。

隋の煬帝は氣宇広大な、同時に人力財貨を惜しみなく濫費した暴帝であった。外に無益な外征をくり返し、内

前号のあらすじ

法然上人の生きた時代は、いうまでもなく世の中が公家社会から武家社会へと移行していく過渡期であった。安楽房遵西が坊門局に阿波ノ局を引き合せてこの頃、武家社会にも公家社会にも変革の波が押し寄せていたのである。武家社会では源頼朝の死があり、まだ若い源頼家が將軍位についていた。阿波ノ局は源実朝の乳母であり、坊門局との密会は名門坊門家から実朝に夫人を向えるための打診であった。坊門家の姫君との縁組は実朝が將軍位につくための基礎事実となるはずのものであった。

一方、公家社会では久我通親の強引な画策により、通親の妻高倉範子の連れ子在于と後鳥羽上皇との間に生れた為仁親王が即位して土御門天皇となっている。天皇の外祖父となつた通親は「院別当」という要職につき、今や政敵九条兼実も及ばない地歩を占めたのである。そして建仁二年十月、久我通親は謎の急死を遂げた。

には次々と大土木工事を起こした。その大土木工事の最たるものが首都洛陽から揚子江岸の商都楊州とを水路でつなぐ大運河である。幅五〇メートルの運河は延々と山岳や平原を縫って江南の地まで伸びた。

煬帝はこの大運河に竜舟を浮かべ、何度か楊州へ旅した。大業十二年の秋(六一六)新造の豪華竜舟は、沿岸住そんな古代中国の話を紛々と語る後鳥羽上皇の姿を想

＜揚子江一景＞



民の怨嗟の視線や怒号をかいぐり、楊州へ最後の旅を試みた。すでに民心は隋朝から完全に離反していたのである。

楊州の宮殿へ到着するや煬帝は千人の美女を集め、連夜歓楽にふけた。

その夜、煬帝側近の寵臣宇文文化及は閨房へ乱入、まず十二歳になる皇太子の首を斬り落した。さらに刃を煬帝へ振りかざした。

「天子の首を斬り落すつもりか」

煬帝は逆臣を睨らみつけた。

さすがに宇文化及の手もとはひるんだ。

「誰か、毒を持て」

煬帝は叫んだが、閨房周辺は逆臣がいるばかりで、誰一人命令に応ずる者はいなかった。

「そなたがやるのだ」

煬帝はかたわらの皇后に命じた。天子の生命を絶つ有資格者は、みだりな者であってはならない。煬帝なりの帝王学であろう。

皇后はやむなく、身にまとった絹を煬帝の首にまわした。その直後、三十九年間の暴帝の生涯は閉じられた。

像出来ないであらうか。

それに刺激されて、と言うよりも上皇の愛情をつなぎとめ、自己保身に窮々とした承明門院が、閨を共にした養父通親の頸に絹を巻きつけた事態も充分に考え得るのである。

ただし、痕跡を裏付ける資料は絶無である。熱帯夜を妖しく彩ったミステリイ幻想と言うほかはない。

長袖の梟雄久我通親は原因不明の急死を遂げた。建仁二年（一二〇二）の十月、五十四歳であった。

ただしこの幻想ミステリイは舞台の袖幕から顔を覗かせている女性の影を見落すわけにはいかない。

藤原兼子。承明門院の母範子の妹にあたる。後鳥羽上皇の揺籃時、姉ともどもにその乳母をつとめた。

このミステリイ劇が上演されたころ四十九歳。九条兼実の家司を勤める権大納言宗頼の妻であった。そのままで歳を喰いゆけば廟堂への登場なぞあり得なかったであろう。ところが久我通親が急死するや直後に夫の宗頼も頓死してしまう。火傷が原因だということだがこの死もミステリイの付録に収載してもかまわぬかも知れぬ。

未亡人となった兼子は俄然、上皇側近で派手に振舞い

はじめる。昔の乳母、それだけの理由で上皇は兼子を重んじたのであらうか。通親除去の論功行賞、ないしは同志の結合、と考えられぬであらうか。

兼子の脚下を照らすまばゆい光彩に、廟堂の公卿たちはいっせいに注目する。先ず大納言通資が執拗に求婚してくる。通資は死んだ久我通親の実弟だ。当然、兼子はこんな男を相手にしない。次の求婚者は太政大臣頼実だった。

頼実には三十年来の愛妻がいた。すでに五十歳だ。でもその妻を捨てても、という固い執心である。建仁三年のある晩、兼子はこの頼実と再婚した。

後鳥羽上皇の信頼はある。夫は太政大臣である。兼子のゆくてには権力の花々が咲き乱れる華麗な道がひらけたことになる。人事権の殆んどを掌中にした。

兼子自身も除目ごとに榮進をとげ、ついに従二位にまで昇りつめた。「卿二位」と呼ばれた。また追従者には惜しみなく官位を取り持った。

歌人の藤原定家などは日記（「明月記」）で兼子を「狂女」と罵倒しつくしながら昇官が内定すると、深夜にもかかわらずお礼言上に訪問する始末である。

しかし通親怪死のミステリー、それにつらなる卿二位兼子の抬頭。表面の動きはただれた野望と激情の渦だけの筋書ではなかった。そこには一途なモチーフがあった。利害の計算でがっちり支えられていたのである。

後白河法皇の崩御とともに奪われたその遺産「長溝堂領」の奪還である。

この莊園が臨終の法皇を脅迫して浄土寺二位（丹後局）と新しき同志久我通親が奪った事実は前にふれた。その久我通親が先ず除去されたのである。続いて丹後局の廟堂からの追放だ。

女性としての最高位、同じ「二位」にまで昇りつめた兼子は今やライバル丹後局高階栄子の息の根を閉ざそうとしている。

丹後局もまた必死の巻き返しを画策する。老女たちの凄さまじい権力闘争が展開してゆくのである。

そして結末は、後鳥羽上皇の独裁制の確立であった。

二

何の前ぶれもなく、いきなりその朝、丹後局高階栄子が光堂に現れた。牛車にこそ乗ってはきたが、供らしい

表は誰一人連れていなかった。

「僧都、ご供養をお願いします」

「源博陸の、ですか」

思わず明遍は訊きかえした。久我通親の急死が報ぜられて間もないころだったからである。

「内大臣のですって……違います。法皇のご供養です」

後白河法皇の追善回向だという。

明遍は素直に仏前に坐った。

それだけが訪問の目的だとは思われない。しかし近ごろに高階栄子は法皇の名を口にするとき、いつも憑かれたような素振りになる。法皇の霊が自分に乗り遷って何かを命令してくる、ともあからさまに言ったりする。

略法の供養を終えた。

高階栄子はようやくけわしい眼つきをなごませて明遍と対座した。

しみじみと容色をあらためてみる。

かつて「楊貴妃」とうたわれた艶色は、かけらも残っていないなかった。そんな盛期にさかのぼらずとも、頼朝の上洛時、思わず船中で情事をかわしたあのころの残香すら消え落ちていた。老女の皺が面上をおおいつくしてい

る。最近の懊惱ぶりを物語る。

「明遍どのは東山の法然房とご懇意なのですか」

「いや、面識は一二度あるが、じっこんではありませぬ」

「法然房の弟子で法本房と申すひじりをご存知ですか」

「法本房行空のことかな。名前だけは聞いていますが、法本房がどうかしましたか」

「不埒なひじりです。宣陽門院が俄かに出家してしまいました」

「行空の手引きで、ですか」

「無道な出家でございます」

高階栄子の語気は激しかった。

宣陽門院勸子。高階栄子が夫の業房が処刑された直後、後白河法皇に見染められ、産み落した一人娘である。久我通親もこの幼い内親王の院司にもぐりこんで出世の糸口を掴んでいる。

高階栄子は長年にわたってこの一人娘を後鳥羽帝の後宮へ入れようと画策してきたが、ついに果たせなかった。それでも故法皇の遺児として高階栄子が宮廷で羽振りをきかす唯一枚の切札でもあったのである。

それが無道な出家。

無道とは僧尼令にのっとらぬ勝手な出家、という意味だ。一介の私僧に過ぎぬ法本房行空では「灌頂」の資格すらないわけである。

「出家させただけではありませぬ。法本房なるひじりは宣陽門院をどこかへ隠くしてしまいました」

「隠くした？」

「情婦になり果てたと思えませぬ」

「法本房が宣陽門院を、ですか」

明遍もあきれた。

行空がかなり過激な専修念仏者である噂はかねて耳にしている。その主唱する一念義が性モラルを踏みじつたものであることも知っている。

しかし、宣陽門院を情婦にして隠匿してしまうなど、やはり考えられなかった。

「考えてもご覧なさい。法皇の御所領はすべてあの宣陽門院の名儀になっているのですよ。内大臣が死なれた今、あの子までがいなくなったら、どうなるのでしようか」

高階栄子の嘆きは、娘可愛さだけではなかったよう

だ。法皇の遺産「長溝堂領」百余カ所に及ぶ荘園のゆくえが心配なのである。

明遍はふと数年前の丹後局を思いうかべる。

建久七年（一一九六）のころだった。つまり船中で彼女が明遍を誘惑して情交を結んだ直後である。

源頼朝をその娘大媛入内で釣って九条兼実との仲を離間させた久我通親は、宣陽門院を中宮に入れる、として高階栄子をも欺ましたのである。「長溝堂領」の一部を割いて自分名儀にしてしまった。いや、その莊園を手土産にわが娘（藤原範子の連れ子）承明門院の入内を果たしたのである。

まんまと通親に欺まされた高階栄子は非常手段に訴えた。橘兼仲という夫妻をそそのかし「狐ツキ」に変身させた。兼仲夫妻は宮廷の内外でわめき散らした。

「われこそは後白河院の霊なるぞ。一刻も早く廟を建てよ。その廟に所領を寄進せよ」

四年前に崩御した後白河法皇の廟所が未だ出来ていなかった。宮廷の財政に逼迫しており、そんな余裕はなかったのである。しかし先帝の廟所を造立していいとはいは、後鳥羽帝以下が最も痛いところであった。

ところが「狐ツキ」が要求する寄進が、丹後局が失った所領ばかりだったので、たちまち狂言がバレた。高階栄子まで咎め立てることは出来なかったが、橘兼仲の隠岐の島へ、妻を安房へ流罪にしてケリとなった。

女の浅慮、狂燥状態におち入ったときの醜惡な姿を見せつけられた思いで、明遍は二度と高階栄子と情事を交わさなかった。

その狂燥が再び丹後局の身邊に立ちこめている感じであった。

「とにかく法本房と会って、真相をただしてみましよう」

と約束し、高階栄子に帰ってもらうほかはなかった。廟堂で卿二位兼子が昇天の勢いで権力の座をかためてゆくのと全く同じカーブで浄土寺二位高階栄子は失落していった。これから数年後の話であるが、彼女はもう一度、後白河法皇の亡霊をよみがえらせている。ただし、この妖言事件、果たして栄子の発想であったかどうか、疑問のフシもある。

その元久三年（一二〇六）の四月二十一日、院で緊急会議が開かれた。議題は後白河法皇の廟所設立に関するこ

とだった。

前回と同様に狂った女性が故法皇になりきって「一刻も早く廟所を作って、つつしんで我れを祀れ」と各所へ強談判に及んだからである。この女性は、かつて法皇の側近に仕えた法師仲国の妻で、廟所の守官に夫の仲国を任命せよ、とも言った。

こんな妖言だけなら、院で緊急議題になるはずもなかったのだ。狂女の強談判を受け、これを退けた摂政良経が、直前の三月七日、謎の急死をとげたのである。

良経は九条兼実の嗣子であった。兼実が久我通親の策謀で失脚した後、しばらく冷や飯を食わされていたが、その死によって廟堂の中心へ返り咲いたばかりだった。

しかし会議では誰もまともに妖言を取り上げる者はなく、またしても政界へのカムバックをねらう浄土寺二位の画策であろう、ということになった。

たしかに高階栄子が仲国夫妻の妖言に便乗して騒ぎまわった形跡はある。だが前回と異なり、発想は別人から出たように思われてならない。

この事件処理は、前回と異なり仲国夫妻を摂津国の山寺へ押しこめただけで、きびしい処罰はおこなわれなか

った。そればかりかほとぼりがさめると仲国夫婦は摂津から呼び戻され、卿二位兼子の後見役としてむしろ好遇を受けているのである。

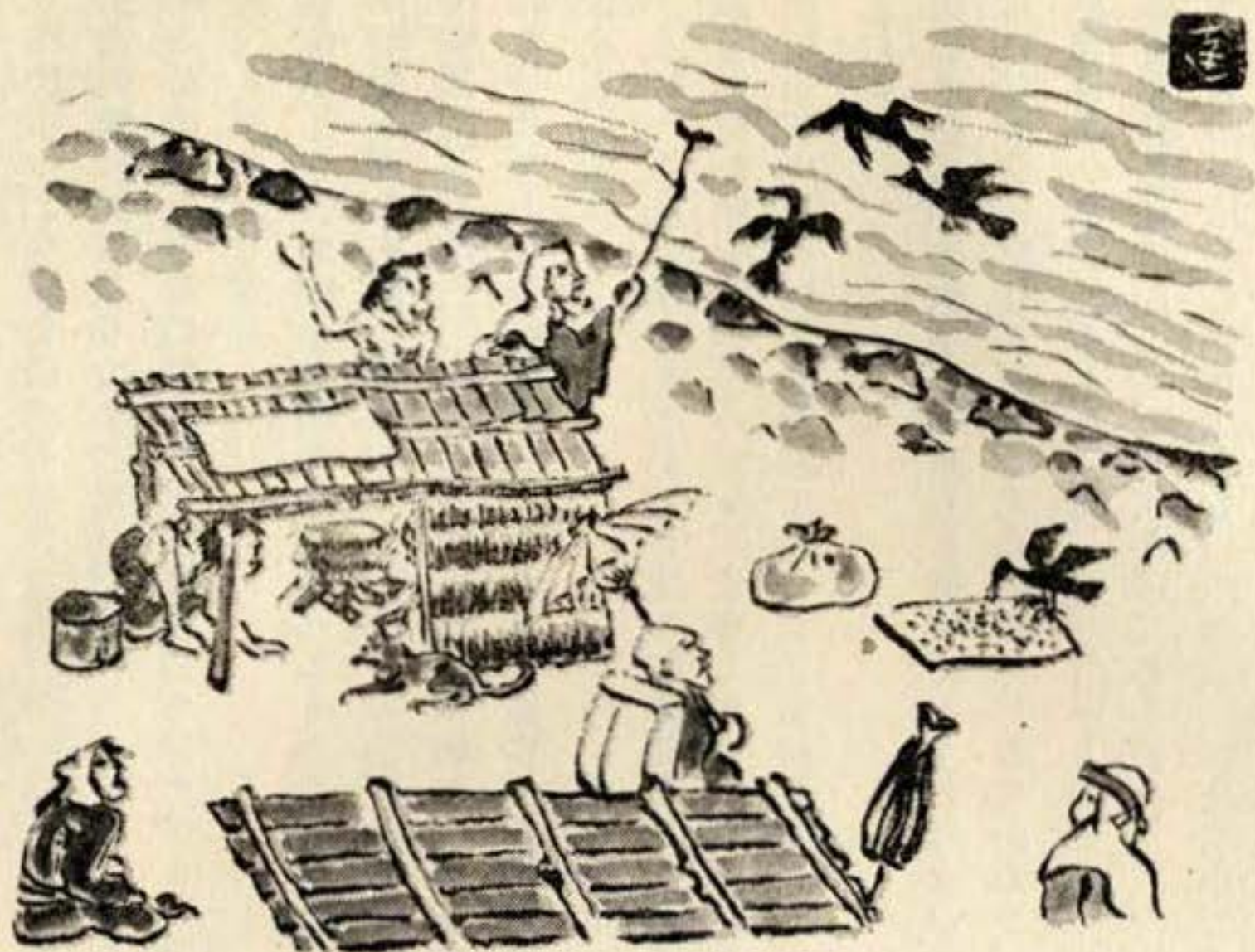
つまり元久三年の妖言事件には、悪どく二つの効果をねらったと考えられなくもない一つは、高階栄子の完全失脚。もう一つは摂政良経の怪死を隠蔽するねらいだ。また、そこまで隠蔽を計算したからには、良経の死そのものも単なる頓死とは思えなくなる。

この事件を詳述しているのは慈円著といわれる「愚管抄」である。しかし慈円の筆はこのあたりから論旨が乱れ、別人の手によって成ったか、と思われるほどだ。近ごろの学者のなかには脳に異常を来たしたのではあるまいか、と憶説する人さえある。慈円は仲国事件のあと法然念仏にふれ、口汚たなく罵っているからである。実兄である九条兼実の専修念仏への帰入、甥良経の怪死と言い、慈円自身がきわめて複雑な立場にあったのも事実であろう。

この点については後の章で詳しくふれたい。

それはともあれ、廟堂に妖光を放ち続けた高階栄子は完全に失墜し、新たな惑星卿二位兼子の誘導で後鳥羽院

＜四条河原の小屋掛け風景＞



政は狂気の軌道を暴走してゆくのである。

三

四条河原には点々と小屋掛けがあった。

春がめぐってきて、堤に草が伸びさかるころ、この小屋は数を増した。家無き流民が冬の間は何処かへもぐりこんでいて、季節が和らぐと舞い戻ってきて小屋を結ぶのである。

「多分、あれに間違いはありませぬ」

と、若い正信房湛空は指さして、自信ありげに言った。

同じ小屋掛けでもそこは底部を石で固めた本式のものだ。どこへも去らず、ここで越年しているにちがいない。

「あれが一宿ノ精舎か」

明遍は微笑んだ。

一宿、にいかにもふさわしい構えだからである。主（あるじ）の念仏ひじり法本房行空は、そこを訪れて彼の説法を聴問した者は誰でも一夜の宿を供する、という噂であった。酒を飲む男なら、どこから持ち来たって、

飲み明かした。宿のない女なら、老若美醜を問わず泊めて、同衾するともいう。

天衣無縫な生活ぶりであった。

「本人が申しているのだから、間違いございませんまい」
湛空も笑った。

このひじり、東山から明遍を案内してきたのである。

高階栄子との約束が気にかかり、彼女の訪問から数日して明遍は、宣陽門院失踪を糾明すべく東山に法然をたずねた。ただし法然は他出しており、高弟の法蓮房信空に会えた。

いろいろと法本房行空の行状などを聞き出して、いちど四条河原の庵を訪ねてみたい、と申し出た。信空は案内役に比叡山黒谷以来の侍者であった正信房湛空をつけてくれた。

きびきびとしており、何事も正確にやってのけそうな好青年だった。宮仕えでもしたら能吏になるであろう、と明遍は思った。

湛空は精舎に近づくと、立てかけてある戸板を叩いた。「おう」と声が内部でした。

精舎とは名ばかりで、二間四面ぐらいの石くれの土台

にやたらと古材や板を寄せ集めた三角屋根の小屋掛けだった。

声はしたが、容易に主は出て来ない。

「行空どの、東山の正信房でございます」

「何ぞ用か。用ならそこで言え」

「お客さまです」

「客だと……面倒じゃのう。いま、わしは女と寝ておる」

言わなくてもいいようなことであつた。いずれ昨夜、問法に來た女であろう。

しかし、明遍は黙って歩み出ると、戸板を剥がすようにして小屋の内へ陽光を入れた。

いま行空が合衾しているという女が、宣陽院勸子のように思われてならなかったからである。

ただれた圍の氣配が、差しこんだ陽光でハジキ飛んだ。法本房行空は大の字になっている。左右に二人の女が、半裸のいぎたない姿で眠っている。

行空はむっくり起き上がったが、女どもはそのままの姿勢を崩さない。いきなり踏みこまれ、氣恥ずかしくて動けないのであろう。

宣陽門院とはおよそ別人である。左右に横たわる女はいずれも中年がらみだった。宣陽門院はたしか二十二か三の女盛りである。

起き上がった行空は、顔も胸も髭むじやらである。いかにも逞ましい身体つきだ。

明遍の矢次早の質問に、行空は記憶をたぐり寄せる姿勢になったが、

「そう言えば二十日程前、妙な女が現れたことがある」

と狐につままれたような体験を物語った。

その日、暮れ方の堤の上で一台の牛車が停まった。供の者が数人警固する物々しさだった、やがて牛車のなかから若い女性が引き出され、供の者たちに左右から抱きかかえられるようにして、行空の精舎まで降りてきた。

「ご房は、どんな者でも一夜で出家得度させ、あまつさえ生身のまま極楽浄土へ連れ参るそうじゃな」

頭らしい武士が詰問した。

「この宿に一夜泊まれば誰でも往生疑いなし」

行空は答えた。拉致されてきたらしい若い女人、それも狩衣の下には豪華な唐衣装束をまとっている。やんごとない身分に違いない。

供の武士どもは行空に女を犯して、黒髪を断ち切って落飾してしまえ、と強要する。

行空は明遍に向って、

「おのれの意志でやつてきた者になら何でもしてやる。

だがその女人は強制されてきたようじゃ」

と当夜を回想して語る。

「それで、どうなさった」

「とんだ立ちまわりだ。武士どもは女を犯せと迫る。わしは絶対に嫌だと小屋の内に入れぬ。とうとう奴ら、太刀を抜きおった。わしも応戦しなければ命が危ない。その丸太を振りまわして死にもの狂いで戦った」

「なるほど」

「女を犯せ、と迫られて、それはことわる、と死にもの狂いで戦ったのは初めのことじゃ」

誰だって初体験であろう。据え膳を拒否するのに命をかけたのである。行空の抗戦が熾烈なので、武士たちも諦らめて、若い女を再び牛車のなかへ戻し、いずれへかへ立ち去ってしまったという。

「それが宣陽門院とやなかな」

「多分、そうであろう」

「宣陽門院とは、法皇の遺児であろうが。浄土寺二位の娘で」

「そうだ」

「何で、誰があんなことをやりくったのかな」

「わたしも知らない」

そこで明遍は、高階栄子が来訪し、娘の失踪にあたふたしている事実を告げた。

「とにかく行空、おぬしが宣陽門院をかどわかし、落飾させた、ということになっている」

「めっそうもない話だ」

立ち話をしている明遍たちの横を、身ずくろいをととのえた女二人が、盗み食いをした、猫のようにすり抜けていった。

後ろ姿はいずれも卑しい身なりである。いずれ春をひさぐ老いさらばえた笑婦たちで、男にあぶれ一夜の宿を求めて行空の小屋へ転ろがりこんだのである。

そんな女とは真剣に情事をつとめる法本房行空である。だが、押しつけてくる高貴な女人には殺されても手を出さぬ。

行空の話に嘘はない、と信ずることが出来た。

「おぬしは念仏ひじりのなかでも無頼、乱倫で名を売っておる。だからそれを利用しようとする罌が張りめぐらされるのだ」

明遍は忠告した。

「だが、そんな罌を張りめぐらして、いったい何になるのだろうか」

たしかに目的が不明である。それだけに罌の底はぶ氣味に深い。

行空に別れを告げて、明遍と空とが堤の上まで戻ってきたときだ。数人の荒法師たちが河原へ降りてゆくのを遠望した。小屋掛ける片っ端から覗いて内部をあらためている。彼らは手に手に太刀や長刀をひっさげていた。

「やっ。あれは無動谷の松丸坊だ」

湛空が叫んだ。比叡山にいる湛空だ。顔見知りの荒法師を発見したのである。

「何しにこんなところへ」

明遍には、僧兵どもが法本房行空を襲ってきたに違いない、と判断することが出来た。それにしても荒法師どもが、一介の乞食ひじりを襲撃するとは、いったい何ごとであらうか。

(つづく)

二 編集後記 二

○「目あき千人、目くら千人で、それが世の中というものである」(山手樹一郎『千石鶴』より)——確かに、この世間の事柄は種々雑多、そこに生きる人の姿も心も千差万別である。師走十二月の街中に行き交う人の波は、あたかもこの一年の世相を反映して、楽不楽、幸不幸の別のあるのもやむをえない。だれでもが楽しく明かるく、幸せな生活を営むことができれば、もちろんそれにこしたことはないが、やはりこの世の中、善悪明暗の入り混じったところに息づいているのである。天下を統べ、大阪城というこの世の極楽を築き、栄華の極みに登りつめた、あの豊太閤秀吉でさえ、

露とおち露と消えにしわが身かな

なにはのことも夢のまた夢

と詠んで、この世に別れを惜しんでいったという。明朗快活時代小説の元祖山手文学の世界ではないが、そこには正義の主人公

も敵(かたき)役もない、人と人との浮き世の絵模様が織りなされるだけである。しかしそれがまたたまらなくすばらしいのであり、だれの心にも、おしつまった今年への反省と惜別以上に、新しい年への夢と希望が大きくふくらむのである。

年暮るる音の渦巻く町ずまひ 良章

年の瀬のふと人恋し終電車 ゆう一

○『浄土』誌は、会員諸兄の暖かい善意によつて、念仏信仰を深め、そして「南無阿弥陀仏」の称名の実践に小さな精進をいたすための小冊子である。寄稿していただく先輩識者の先生方も、ただただ心のやさしい触れ合いと誠意によつて、誌面の充実に力を貸して下さるのである。ありがたいことである——編集子としては深く頭を垂れて、心から感謝をするだけであるが、これからは私も、より一層誌面を明かるく美しく飾り、誤字や脱字のないように編集校正作業にはもっともっと誠実な姿勢で臨みたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四巻 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十三年十一月二十五日 印刷

昭和五十三年十二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

ぶつ じ ねん 念 持 仏

=新発売=



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円 (五十体以上は一割引)

送料 一体 200 円 (五十体以上は無料)

●寸法 21.8cm × 14cm 3枚折・実用新案登録済＝番号53-044860号

(発売元) 〒153
 東京都目黒区目黒 4-16-12

株式会社 泰 童
 TEL (03) 711-6006

(取扱い) 〒102
 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法然上人鑽仰会
 振替(東京)8-82187番